

平成24年8月下旬～9月中旬の北日本と東日本の高温について ～ 北日本は3旬続けて高温の記録を更新 ～

太平洋高気圧の勢力が日本の東海上で非常に強まり、北・東日本は厳しい残暑となりました。北日本の旬平均気温は、8月下旬から9月中旬までの3旬続けて、統計を開始した1961年以降で最も高くなりました。

1. 天候の特徴

北日本と東日本では、8月半ば頃以降、暑い晴れの日が多く、気温のかなり高い状態が続いています（第1図、第2図）。

北日本の旬平均気温は、8月下旬から9月中旬までの3旬続けて、統計を開始した1961年以降で第1位となりました（第1表）。

また、東日本の旬平均気温は、8月下旬と9月上旬が1961年以降で第2位、9月中旬は第1位（タイ）となりました（第2表）。

2. 大気の流れの特徴（第3図）

8月下旬～9月中旬の期間、日本付近の上空では北東海上を中心に偏西風が大きく北に蛇行しました。これに関連して、日本の東海上で太平洋高気圧の勢力が非常に強まるとともに、北・東日本に張り出しました。高気圧の張り出しに伴って南から暖かい空気が流れ込んだことや、高気圧に覆われて晴れたことなどにより気温がかなり高くなりました。

日本付近の偏西風の北への蛇行には、アラビア海からベンガル湾にかけてとその周辺域でモンスーンに伴う積雲対流活動が活発だったことが一因と考えられます。

また、8月下旬と9月中旬は、偏西風の北への蛇行に加えて、フィリピン北東海上の活発な対流活動や沖縄・東シナ海を北上した台風（第14号～第16号）の影響により、北・東日本で高気圧が非常に強まったとみられます。

3. 今後の見通し

日本の東海上の太平洋高気圧は南東に退き、日本付近は、移動性の高気圧と低気圧が周期的に通過するようになる予想となっています。このため、北日本では、平年の盛夏期の気温を上回るような極端に気温の高い状態は収まる見込みです。ただし、今後2週間程度は、平年と比べると気温の高い日が多く、特に向こう1週間はかなり高い状態が続く見込みです。

※ 本分析にあたっては、異常気象分析検討会¹委員の協力を頂きました。

¹ 気象庁が平成19年6月に設置。社会経済に大きな影響を与える異常気象が発生した場合に、大学・研究機関等の専門家の協力を得て、異常気象に関する最新の科学的知見に基づく分析検討を行い、その発生要因等に関する見解を迅速に発表することを目的とする。

第1表 北日本の旬平均気温平年差（℃）の高温の記録（8月下旬～9月中旬）

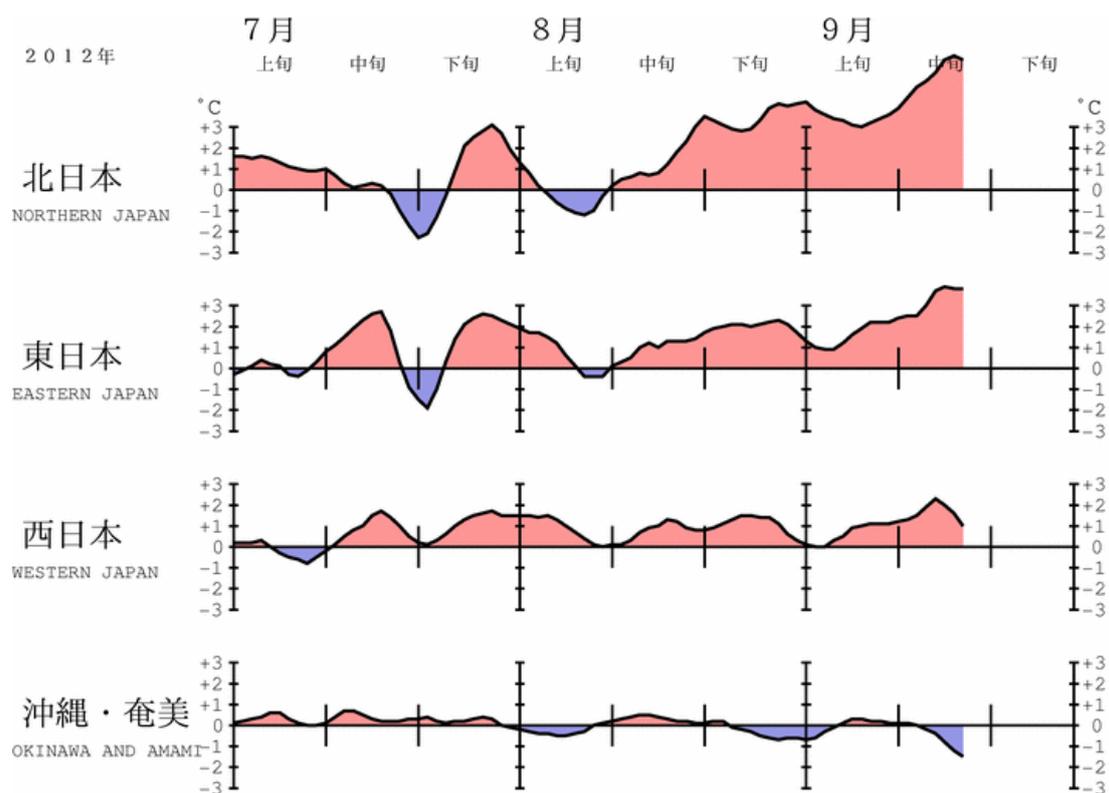
統計開始年は1961年。平年値は1981～2010年の平均値。赤字は今年（2012年）の記録を示す。

北日本	第1位	第2位	第3位
8月下旬	+3.5 (2012年)	+3.1 (2010年)	+1.9 (2000年)
9月上旬	+3.3 (2012年)	+3.1 (2010年)	+2.5 (2011年)
9月中旬	+5.5 (2012年)	+2.0 (2000年)	+1.8 (2007年)

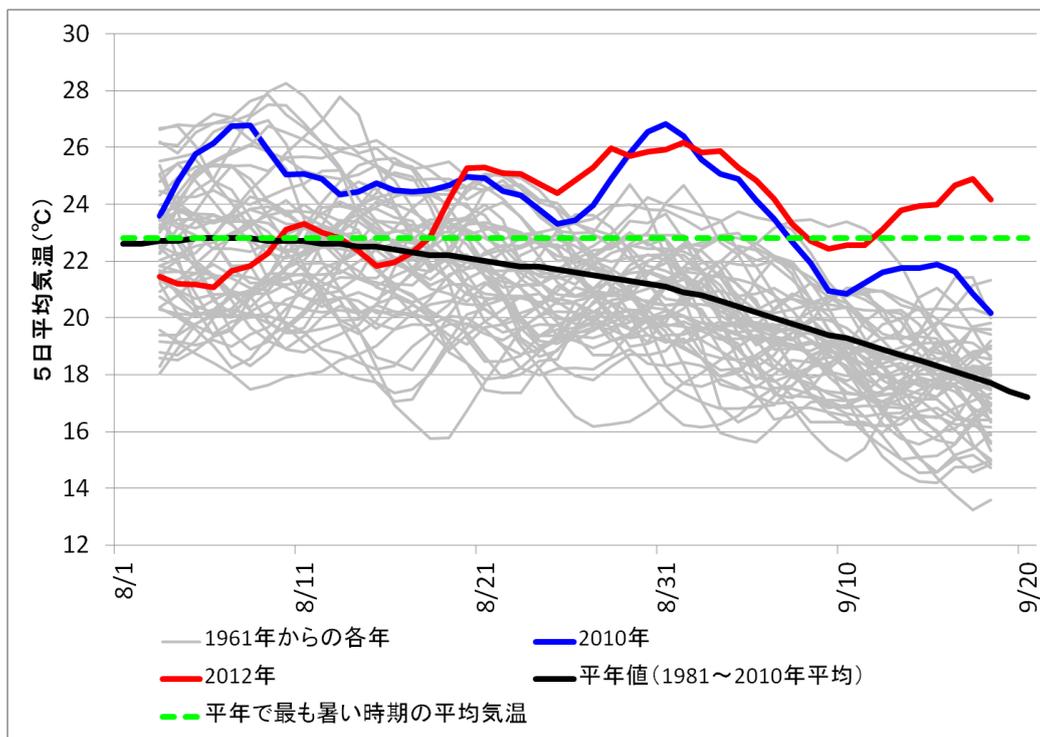
第2表 東日本の旬平均気温平年差（℃）の高温の記録（8月下旬～9月中旬）

統計開始年は1961年。平年値は1981～2010年の平均値。赤字は今年（2012年）の記録を示す。

東日本	第1位	第2位	第3位
8月下旬	+2.7 (2010年)	+2.1 (2012年)	+1.7 (2000年)
9月上旬	+2.9 (2010年)	+1.5 (2012年)	+1.5 (1961年)
9月中旬	+3.1 (2012年)	+3.1 (2011年)	+2.3 (2003年)

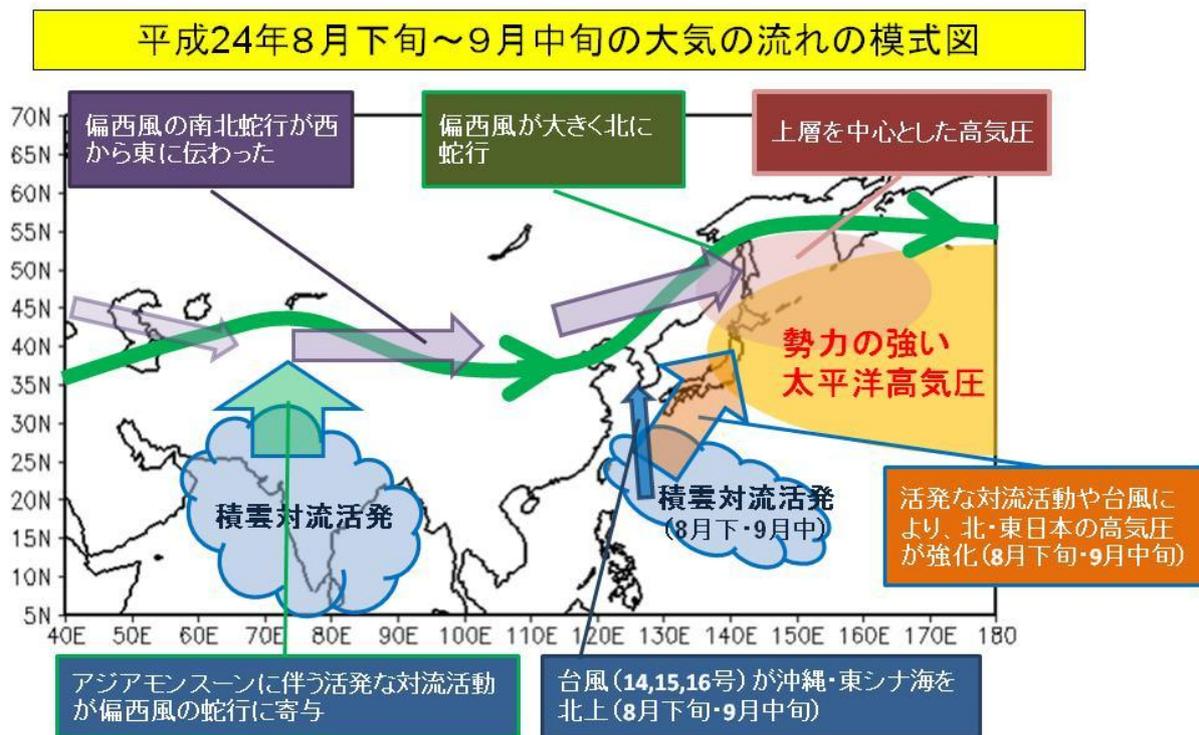


**第1図 平成24年7月1日～9月18日の地域平均気温平年差（℃）の推移
5日移動平均した値。**



第2図 1961年以降の各年の8月3日～9月18日における札幌の5日移動平均気温(°C)の推移

緑破線は、日平均気温平年値が最も高い日の値を示す。平年値は1981～2010年の平均値。



第3図 平成24年8月下旬～9月中旬の大気の流れの特徴(模式図)

【本件に関する問い合わせ先】

地球環境・海洋部気候情報課

03-3212-8341 (代表) 内線 3154、3158